

周知のように1970年代から現在までの間に、わが国の大腸癌診断は従来のX線診断から内視鏡による診断が主流となり、今日わが国の大腸内視鏡診断は世界を席巻するに至った。そのためのデバイスも大きく変化し、通常内視鏡から拡大内視鏡、超拡大内視鏡へと進展してきている。

しかし食生活の欧米化その他の原因で、大腸癌死亡率は先進国中で最も高く、国内の癌死亡者数では男女合計は2位となり、毎年約5万人以上の方々が大腸癌で死亡している。この状態を大幅に改善していくためには、大腸がん検診—大腸癌のスクリーニングとサーベイランスの充実・進展が必要である。なかでもその中心軸を大腸内視鏡検査に置くべきであることは本号で各論者が指摘しているとおりでである。対策型大腸内視鏡検診実現へ向けて諸問題の解決を図る、これが喫緊の課題として問われている。読者が各論文でそれらをじっくり吟味していただければ幸いである。

現在世界的には、ランダム化比較試験での全大腸内視鏡検診の有効性評価に関して五つの研究が進んでいる。そのうちの一つがわが国の「Akita pop-colon trial」(厚労省研究事業)である。本研究は2009年に開始され、参加登録が終了し初回の検診大腸内視鏡検査も終え、有効性に関するデータが蓄積されている。近くその成果が公表される。対策型大腸がん検診に大腸内視鏡検査が推奨される契機になっていくことを期待したい。

本号で紹介されている「新島/大島スタディ」「青森プロジェクト(Project A)」やその他の業績と問題提起は大腸内視鏡検診実施へ向けて大きなはずみとなる。本特集に寄稿いただいた諸氏に謝意を表したい。

今日コロナ禍のなかで、がん検診受診者数が激減した事実が報じられている。内視鏡関連学術誌でも論文が散見されるようになった。膨大な癌未発見例、生存率の低下、死亡数/死亡率の増大が危惧され、現実のものとなっている。「日本の、世界の大腸癌死を減らす」究極目標をもつ大腸専門医が今こそ問われる時代になった。結束して事に当たるべき時代になったのを痛感する。

工藤進英(昭和大学横浜市北部病院消化器センター)

INTESTINE

Vol.25 No.1

©2021年5月20日発行

定価 3,520 円(本体 3,200 円 + 税 10%)

●年間予約購読は前金にて書店あるいは弊社宛お申し込み下さい。ただし、年間購読料は年度により異なりますので、書店または弊社までお問い合わせ下さい。

・ Published by Nihon Medical Center, Inc.

© 2021, Printed in Japan

・ 本誌に掲載された著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権(送信可能化権を含む)は(株)日本メディカルセンターが保有します。

・ **JCOPY** 〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉

本誌のコピーやスキャン等による無断複製は著作権法上での例外を除き、禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に出版者著作権管理機構(☎ 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。

編集 『INTESTINE』編集委員会

発行人 増永 和也

発行所 株式会社 日本メディカルセンター

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-64(協和ビル)

営業直通電話 (03) 3291-3901 (代) FAX (03) 3291-3904

e-mail info@nmckk.co.jp

編集直通電話 (03) 3291-3971 (代) FAX (03) 3291-3377

e-mail intestine@nmckk.co.jp

印刷所 シナノ印刷株式会社

広告申込所/株式会社 文栄社 〒113-0033 東京都文京区本郷 3-26-1 電話 (03) 3814-8541